

金国璞北京語教科書における清末北京語の特徴
Characteristics of Beijing Dialect of Jin Guopu's Beijing Dialect Textbooks

楊璇
YANG Xuan

要旨：太田辰夫先生は蜚聲國際的漢語史專家，在漢語語法史及詞彙史的研究上極富開拓性。太田先生發表的以北京話為研究對象的多篇論著對明清時期的北京話研究產生了重大而深遠的影響。本文以太田先生發表的三篇深究北京話特質的論考為基礎，緊密結合太田先生在這三篇論考中提出的北京話特質，對比分析金國璞所著的北京話教科書中的語言特點。本研究對於清末北京話特質考察的共時研究及歷時研究均有一定的價值和意義。

キーワード：金国璞 北京語教科書 太田辰夫 清末北京語 文法特徵

目次

- 1 太田氏の研究における北京語の特徴
- 2 「北京語における7項目の特徴」と金氏教科書の比較
- 3 「北京語に独特と思われる12語」と金氏教科書の比較
- 4 金氏教科書と「北京語の文法特徴」について
- 5 まとめ

1 太田氏の研究に関する北京語特徴

太田辰夫氏は北京語文法研究の第一人者であり、中国語に関する研究を広くおこない、開拓的な研究を数多く残した。特に、太田氏の代表的な著作《中国語歴史文法》と《中国語史通考》は中国語の歴史研究に重要かつ深い影響を与えてきた。

太田氏は北京語の研究に関する論文を数多く発表しており、山田忠司氏(2016:18-19)によると、太田氏が北京語の特徴について探究した論文は「清代の北京語について」、「北京語の文法特点」、「近代漢語」の3つである。各論文に論述した北京語の特徴を簡潔に紹介する。

1) 「清代の北京語について」(1950『中国語学』第34号)

太田氏は「北京語に独特と思われる語」の中に、頻用される「兒」、「嗜(咱)們」、「您」、「倆(仨)」、「別(禁止)」、「得(děi)須要」、「多嗜」、「給(介詞)」、「的慌」、「是(似)的」、「來着」、「罷咱」の12語を提示した。

- 2) 「北京語の文法特点」(1965『中国研究：経済・文学・語学 久重福三郎先生坂本一郎先生 還暦記念』)

この論文は名詞、代名詞、数詞・量詞、形容詞、動詞、副詞、助詞の8種類に分けて、北京語、北方語、北方方言、南京官話及び他の方言との差異を考察し、全72項目、100個以上の語彙を挙げた。

- 3) 「近代漢語」(1969『中国語学新辞典』第186頁)

「近代漢語」は『中国語学新辞典』の一項目であり、項目名は「近代漢語」であり、「清代漢語」を指している。この論文では、「一人称代詞の包括形 (inclusive) と除外形 (exclusive) を〈咱們〉〈我們〉で区別する。〈俺〉〈咱〉などは用いない。」、「介詞〈給〉を有する。」、「助詞〈來着〉を用いる。」、「助詞〈哩〉を用いず〈呢〉を用いる。」、「禁止の副詞〈別〉を有する。」、「程度副詞〈很〉を状語に用いる。」、「〈一多了〉を形容詞の後に置き“ずっと、はるかに”の意を表す。」という北京語における7項目の特徴を指摘した。

本稿では、上述した太田氏の研究における北京語の特徴に基づいて、明治30年(1897)に開校した高等商業学校附属東京外国語学校の講師として日本文部省により招聘され、日本で6年間勤務した北京語教師金国瓌が編纂した11冊の北京語教科書の比較対照を行い、金氏教科書に用いた言語は太田氏の研究における北京語の特徴を有するかどうかを探究する。さらに、金氏教科書の言語実態を解明したいと考える。

2 「北京語における7項目の特徴」と金氏教科書の比較

太田氏が「近代漢語」に提示した「清代北京語における7項目の特徴」は清代北京語に関する研究に多く取り込まれている。本節は金氏教科書で使われた言語が「北京語における7項目の特徴」に当て嵌まるかどうかを考察する。

- 1) 一人称代詞の包括形 (inclusive) と除外形 (exclusive) を〈咱們〉〈我們〉で区別する。〈俺〉〈咱〉などは用いない。

金氏教科書では、「咱們」を「僭們」、「咱們」と書き、それぞれの用例は255例、5例となる。「咱們」より「僭們」という書き方が遙かに多い。また、「我們」との使い分けが非常に厳密だと考えられる。「我們」は除外形で聞き手を含めず。「咱們」は包括形で、聞き手を含む。

- (1) 我們敝國東京高等商業學校和外國語學校，都有漢語科，請的也是貴國教習，另外還是有我們敝國讀書人，自己私立的漢語學房，如今咱們兩國彼此互相習學語言，數十年之後，兩國人才輩出，從此邦交自然更親密了。（《談論新編：北京官話》：第十二章）
- (2) 你若是肯照顧我們，那我們是求之不得的呀。僭們若是交買賣，我們可是不能給現錢哪。（《華言問答》：第四章）
- (3) 依我說，您不如和我們在一塊兒，僭們大碗的喝酒，大塊的吃肉，整套的穿衣服，論秤的分金子。（《北京官話：今古奇觀》：李汧公）

¹ 金氏が編纂した北京語教科書の詳細は付録に研究資料リストを付けており、本稿での略称は「金氏教科書」とする。

2) 介詞〈給〉を有する。

太田氏「北京語の文法特点」は「介詞「給」も南京官話では用いず、「替」「和」などによる。」(第50頁)と指摘した。金氏教科書は介詞「給」の用例が数多く見られる。

(4) 這件事你等我給你想一個好法子，總是給他寄一封信去，借這麼一個大題目告訴他必得再緩多少日子纔能動身回去哪。(《談論新編：北京官話》第二十六章)

(5) 有人給姑娘說婆婆家。(《華言分類撮要》第二十章)

(6) 你告訴趕車的他送下，就趕緊的把車趕回來，我還要給人送行去哪。(《士商叢談便覽》第八十七章)

また、金氏教科書では「給+動詞+補語」という構文もある。

(7) 我這兒可以先給湊出一半兒貨銀來。(《談論新編：北京官話》：第二十九章)

(8) 這麼着他就到殿裡頭，和和尚借了一管筆，蘸好了墨就過來把那個鳥兒腦袋給畫上了。(《北京官話：今古奇觀》：李汧公)

3) 助詞〈來着〉を用いる。

太田氏(1958)は「《來着》は北方語で、過去あるいは回憶をあらわす。…《來》は唐五代からあり、《來着》はおそらくそれから出たもので清代になってはじめてみえる。」(第391頁-392頁)と指摘している。

また「來着」の由来について、常瀛生(1993)は“‘來着表示動作和狀態，過去如此，現在仍如此，來自滿語動詞過去完成進行時態。現北京話仍用‘來着’。其他漢語方言不見得有這樣細緻的時態表現法。”(第194頁)と指摘した。

金氏教科書では「來着」の用例は全部で34例ある。ここでは、過去を表す物と疑問文に添える2種類の使い方となり、それぞれの用例は27例と7例ある。

過去を表す用例：

(9) 一連四五天，我沒幹別的，竟給人說合事情來着。(《士商叢談便覽》第四十二章)

(10) 我可知道昨兒晚上下雨來着。(《官話指南》第一卷：應酬瑣談)

疑問文に添える用例：(11) 您在誰家換來着。(《華言問答》第二章)

(12) 給人說合甚麼事情來着。(《華言問答》第十三章)

4) 助詞〈哩〉を用いず〈呢〉を用いる。

金氏教科書では、「哩」を用いることがなく、「呢」の用例が数多く見られ、計530例ある。使い方は主に疑問文に添え、疑問文の語気を強める用法となる。その他にも感嘆を表す用例も見られる。

特指疑問文の用例：(13) 各衙門學堂公司，都是看甚麼新聞紙呢。(《士商叢談便覽》上卷 第七章)

選択疑問文の用例：(14) 可是打算是在飯莊子還是飯館子呢。(《搢紳談論新集》第十七章)。

反復疑問文の用例：(15) 那麼商量商量，咱們交買賣可以不可以呢。(《華言問答》第七章)。

反語文の用例：(16) 何必那麼廢事呢。(《虎頭蛇尾》)。

感嘆を表す用例：(17) 雖說這不是頭生兒，然而得子可是頭一次呢。(《搢紳談論新集》第一章)。

5) 禁止の副詞〈別〉を有する。

太田氏(1958)は「禁止をあらわす副詞〈別〉は明代にも若干あるが多く用いられるようになったのは清代である。《不要》の縮約された形であるとも言われるが正しくない。」(第303頁)と指摘している。また、「清代の北京語について」は「別」は北方語で、南京官話では「莫」という。そして、「甬」(beng 2声)も北方語であるが広く通用する語ではない。」と指摘している。

金氏教科書における「別」の使用に関して、公的な場面では使わず、日常的な場面に使う傾向がある。

- (18) 那個刁頭兒外號兒叫刁不飽，心裏頂歹毒，你們和他們說話可要留神別惹惱了他們。(《虎頭蛇尾》)
- (19) 不管怎麼樣，我求你千萬別把這個事給洩漏了，這是一件機密的事情。(《官話指南》第一卷：應酬瑣談)
- (20) 瞧誰有好處，就要跟他學，瞧誰有不好處，就別跟着學，這就是擇其善者而從之的那個道理。(《士商叢談便覽》第九十二章)

6) 程度副詞〈很〉を状語に用いる。

「很」を状語に用いることについて、太田氏(1975)は「明代では稀に補語として用いる。明代の北京語では状語として用いられたことが『燕山叢錄』によって知られるが作品中で普通に使われるようになったのは『紅樓夢』など清代北京語文学からである。」(第2頁)と指摘している。金氏教科書における「很」を状語に用いる用例が数多く見られる。使い方は現代漢語とほぼ一致する。

- (21) 如今我們這位新任的縣太爺人很明白，也很正直，愛民如子。(《華言分類撮要》第一章)
- (22) 只要你勤慎當差部屬升途也甚寬呢，並且你素日又很愛留心例案，這還不是你用部屬的兆頭兒麼。(《縉紳談論新集》第十章)
- (23) 這一天到了保安州，異鄉的地方，很覺着淒涼，又搭著連陰天下雨，更淒慘了。(《北京官話：今古奇觀》：沈小霞)

7) 〈～多了〉を形容詞の後に置き“ずっと、はるかに”の意を表す。

太田氏(1965)は「比較して「AはBよりはるかに……だ」というばあい、がんらい北京語では形容詞の後に「～多了」を用いた。そして北方語の一部ないし南では「～得多」が用いられた。」(第45頁)と指摘した。金氏教科書では「～多了」だけが用いられ、計20例あり、「～得多」の用例は見当たらない。

- (24) 忽然他覺着身上輕省了些個了，把脖子伸了一伸，腰直了一直，可就鬆快多了。(《北京官話：今古奇觀》：十三郎)
- (25) 小的看他那說話的樣子很可疑，又見他穿的衣裳，也比先頭裡體面多了。(《華言問答》：第二十九章)
- (26) 若是這個風氣開了，倘或後來國家忽然有要緊的用項，借本國民間的錢比借洋款強多了。(《談論新編：北京官話》：第八十八章)

3 「北京語に独特と思われる 12 語」と金氏教科書の比較

太田氏は「清代の北京語について」では、北京語に独特と思われる 12 語、「兒」、「咱(咱們)」、「您」、「倆(仨)」、「別(禁止)」、「得(děi 須要)」、「多咱」、「給(介詞)」、「的慌」、「是(似)的」、「來着」、「罷咱」を提示した。また、この 12 語について、「即ち、北京語に独特と思われる語の中、頻用される 12 語を選び、各資料にそれが現れるか(○印)、否か(×印)を示した。これによって○印の計が少い資料は北京語資料として不適当であることが分かる。」(第 1 頁)と指摘した。

本節では、太田氏が提示した「北京語に独特と思われる 12 語」の金氏教科書での使用状況を考察する。また、前述した「北京語における 7 項目の特徴」と重なる点があるため、本節は重複を除き 8 項目のみを考察する。

表 1: 金氏教科書における「北京語に独特と思われる 12 語」の使用頻度

項目	兒	咱們/咱們	您	倆/仨
数量	473	225/5	888	283/0
項目	別(禁止)	得(děi 須要)	多咱/多僂	給(介詞)
数量	145	332	19/5	561
項目	的慌	是的/似的	來着	罷咱
数量	13	0/33	34	0

1) 「兒」

「アル化」語は北京語で最も重要な言語特徴の一つである。太田氏(1965)は、「接尾詞「兒」は南京官話においては用いることが少ない。」(第 40 頁)と指摘している。金氏教科書では、「アル化」語が大量に見られて、全部で 473 個ある。中でも名詞の「アル化」語が一番多く、323 個あり、7 割を占めている。周一民(1998)は「“兒”後綴は名詞の構詞標誌。絶大多數帯“兒”後綴的詞都是名詞。」(第 10 頁)と指摘している。大量の「アル化」語が使われていることから、金氏教科書は会話教科書としての特徴が強いと言える。

(27) 雷刁走後，曹送給毛頭兒十兩銀票說：毛頭兒我這兒有一點兒小意思，你喝盅酒罷。(《虎頭蛇尾》)

(28) 外頭現在還有三處住房，兩處小一所兒的，一處大一所兒的，家兄和三舍弟，各住一處小一所兒的，我同四舍弟住那一處大一所兒的，還算是我們兩人同居。(《縉紳談論新集》第五章)

2) 「您」

「您」について太田氏(1965)は「北方語では二人称の敬称として「您」「您哪」(「哪」はまた「納」とも書く、次も同じ)がある。「您」は南京官話でも通じないことはないが、「您哪」は用いられない。」(第 41 頁)と指摘している。

金氏教科書では「您」を敬称として用いる用例は 888 個ある。

(29) 老爺您看，這個知縣的相貌和前年您放的那個房德，長的一個樣。（《北京官話：今古奇觀》：李汧公）

(30) 現在您要買甚麼東西，可以先由我們櫃上開發錢，趕您多嚮要走的時侯兒，俗們再算帳。（《土商叢談便覽》第十五章）

また、「您哪」という書き方がなく、「您納」の用例は20個ある。楊杏紅（2014：146-147）によると、「納」は日本明治時代北京官話教科書に現れた特殊語気助詞であり、二人称と三人称の後ろに添え、「你納」、「您納」、「他納」になるという。金氏教科書に用いた「您納」の用法に関して、太田氏の「敬称」説と楊杏紅の「您」＋「納」の形で文末語気助詞として用いる説の2種類がある。

敬称の用例：

(31) 趕您走的前兩天，告訴我一聲兒，我把信寫得了，交給您納。（《華言問答》第八章）

(32) 您納說話聲音太小。（《官話指南》第一卷：應酬瑣談）

文末語気助詞の用例：

(33) 是那一位，是我呀您納。（《華言問答》第二章）

3) 「倆（仨）」

「倆（仨）」について太田氏（1965）は「南京官話には「倆」「仨」など数詞と量詞の合わさった語がなく、「倆個」「三個」などという。ただし、北方語の「倆人」「兩個人」に当たるものとして「個」を用いず「兩人」ということがある。」と指摘した。金氏教科書に「倆」を用いた用例が283個あるが、「仨」の用例は見当たらない。

(34) 我現在有一件事，要託你們倆人替我辦辦。（《虎頭蛇尾》）

(35) 不大的工夫兒就見住了轎子，那倆轎夫就都走了。（《北京官話：今古奇觀》十三郎）

(36) 昨天接到來信，說是上海製造局從前請的本國礦師某倆人，已經滿了三年的限了。（《支那交際往來公牘》）

(37) 前十幾年，俗們倆常一塊兒喝酒逛去。（《土商叢談便覽》第九章）

4) 得（dēi 須要）

「得」について太田氏（1950）は、「北方語では時間や費用がかかるというとき「得」（北京では dei 3 声、北方語で de 2 声にも読む）という。南京官話ではこれを用いず「要」という。…「得」は「…せねばならぬ」意にも用い、またしばしば「總得」「必得」などともする。このばあい南京官話では「要」または「該」を用いる。」と指摘した。金氏教科書では「時間や費用がかかる」意と「…せねばならぬ」意の用例は両方見られる。

(38) 他說他有幾千斤蘑菇，還得兩天纔能到哪。（《華言問答》第五章）

(39) 所商量的都可以行，但是裏頭還有得稍微的斟酌的地方。（《支那交際往來公牘》欽差致總署信第二十四件）

5) 「多嚮」

楊杏紅 (2014 : 157) によると日本明治時代の官話教科書には「多嗜」、「多咱」、「多僭」、「多咎」の4種類の表記が使われていたが、中でも多く使われたのが「多嗜」である。「多嗜」は時間を問う意で、現代中国語の「什麼時候」と訳せる。一般的には状語として使われているが、主語と補語の用例もある。

太田氏 (1950) は「時間を問う「多僭」、「多會兒」は南京官話では用いない。」(第43頁)と指摘している。又、楊杏紅 (2014) は「在明治前期的北京官話課本中，多用“多嗜”。如《官話指南》中，几乎都用“多嗜”。到了明治中後期的教材中就出現了“什麼時候”，使用量从少到多。到了《官話急就篇》“多嗜”和“什麼時候”几乎已經平分秋色。」(第159頁)と指摘している。金氏教科書では、「多嗜」と「多僭」の2種類の表記が使われていた。「多嗜」の用例は19個あり、「多僭」の用例は5例ある。「多嗜」という表記の使用頻度が高く、「什麼時候」の用例は見当たらない。

(40) 多僭引見下來的。昨兒個十五召的見。(《縮紳談論新集》第三十章)

(41) 趕回來的時候，在西關外頭大街上，遇見藍貴了，小的見了他就問他是多僭回來的，他說他回來有倆月了。(《華言問答》第二十九章)

(42) 這個亂子一出來，就彷彿天塌了似的，直不知道後來這個禍，到多嗜能完哪。(《土商叢談便覽》第一百章)

(43) 那麼您這銀子是多嗜用哪。(《華言問答》第二章)

6) 「～得慌」

太田氏 (1965) は「一部の心理・感覚をあらわす動詞につきその程度をあらわす「～得慌」は南京官話にはなく「～得很」といわざるを得ない。」(第48頁)と指摘している。金氏教科書では「～得很」の用例が8例あり、「～得慌」の13例より少ない。

(44) 他肚子裏又真餓得慌，身上又真凍得慌，這兩個難受，比甚麼苦都利害。(《談論新編：北京官話》第五十二章)

(45) 乾着急，拿錢買不出東西來，你說我心裏，怎麼是不焦得慌呢。(《土商叢談便覽》第八十六章)

(46) 昨天接到來信，承衆位過獎，寔在慚愧得很。(《支那交際往來公牘》參贊官覆總署信。第七件)

(47) 如今我還腆着臉在這兒作官了，寔在是可羞得很。(《北京官話：今古奇觀》李沂公)

7) 「是(似)的」

太田氏 (1965) は「類似をあらわす「…似的」(shide) は南京官話では用いず「…一般」「…一樣」などという」(第54頁)と指摘している。金氏教科書にある「似的」の用法は2種類ある。一つは連語助詞として「仿佛」と一緒に使い、もう一つは動詞の後ろに置く。どちらも類似をあらわす用法である。

(48) 就仿佛掉樹葉子的聲兒似的。(《北京官話：今古奇觀》李沂公)

(49) 往常山那條路，飛似的跑了去了。(《北京官話：今古奇觀》李沂公)

8) 「罷咱」

太田氏(1950)は「罷咱」が「…しよう」で、「軽い希望」という意味だと指摘した。これは、考察した7冊の清代著作では『滿漢成語對待』と『兒女英雄傳』のみに使用されていて、計24例ある。また、「北京語の文法特点」にも「罷咱」について「やや古く北京語特有の助詞に「不則」「罷咱」などと書かれるものがあった。意味は「罷」に同じ。」(第55頁)と指摘した。

太田氏が提示した12語の中で、金氏教科書で唯一用いない語が「罷咱」である。

4 金氏教科書と「北京語の文法特点」について

太田氏の「北京語の文法特点」では北京語、北方語、北方方言、南京官話及び他の方言に使用する全72項目、100個以上の語彙を考察し、北京語あるいは北方語の特徴を詳しく説明した。本節では、「北京語の文法特点」で考察した項目に基づいて、10項目を取り出し、金氏教科書における北京語の特徴をより詳細に探究する。そして、各項目に太田氏の「北京語の文法特点」での論述を付け加える。

1) 「得了」

「得了」に関する使い方を3つ提示した。

①「…得了」を文末に用いることがあるが、南京官話では動詞後の「～得了」を用いないのと同様に、この場合も使用しない。同様に「…就結了」「…就有了」もやはり北方語に特有のものであろう。

金氏教科書では「…就結了」が14例あり、「…就得了」が20例あるが、「…就有了」の用例は見当たらない。

(50) 您把行李交給我們就得了。(《談論新編：北京官話》第四十五章)

(51) 我告訴看園子的，為丟這麼墊兒菜，不犯打架鬧歐的，後來多留神就結了。(《談論新編：北京官話》第八十五章)。

②可能不可能をあらわす複合動詞「～得了」「～不了」(「了」はliao3声)は南京官話では用いられず「得掉」「不掉」など、その他の語を用いるのが普通である。

金氏教科書では「～得了」「～不了」両方ともを用い、それぞれの用例が12例と62例ある。

(52) 跑得了僧袍不了寺。(《華言分類撮要》第十四章)

(53) 這倒是實話講不了老世台你的。(《縉紳談論新集》第十章)

③「でき上がった」意をあらわす「～得了」(「得」はde2声、「了」は轻声)は南京官話では用いられず、そのかわりに「～起來了」「～好了」「～成功了」などを用いる。

金氏教科書は「～得了」「～好了」を用い、それぞれの用例が22例と44例ある。そして、「でき上がった」意をあらわす際には、「～好了」を用いる傾向が強いと考えられる。

(54) 趕是時候兒，叫他做得了給送到這店裏來。(《談論新編：北京官話》第十六章)

(55) 沏得了茶拿到書房裡來一看，李勉沒在那兒坐着，他就滿屋裡一找所沒有。(《北京官話：今古奇觀》李沂公)

2) 代名詞「這麼」「那麼」

² 太田氏(1950)が考察した7冊の清代著作は『滿漢成語對待』(1702)、『講解聖諭廣訓』(1730)、『玩球官話問答』(1753)、『程乙本紅樓夢』(1792)、『兒女英雄傳』(1878)、『官話指南』(1882)、『九江書會本官話指南』(1893)である。

「這麼」「那麼」を副詞的修飾語として用いるものは南京官話にもないとは言えないようであるが、多くは「這樣」「那樣」という。また「往這麼來」「往那麼去」のごとく言って方向をあらわすことは南京官話にはない。「這麼着」「那麼着」といって「このようである」「そのようにする」などの意の述語として用いることも南京官話にはなく、また「そこで」の意味の連詞とすることも南京官話にはない。

金氏教科書ではこれらの使い方が全てである。

- (56) 同是一樣兒的人，怎麼就應當待他們那麼厚，待我們這麼薄呢。（《土商叢談便覽》第九十三章）
- (57) 在高處一看就見有敵兵哨探往這麼來了。（《華言分類撮要》第九章）
- (58) 我那個時候兒往那麼去，正是秋天。
- (59) 後來官說妳說實話，是把駱駝又勻給誰了不然我是辦你罪，這麼着李老恆一害怕就把盛和棧供出來了。（《談論新編：北京官話》第八十九章）

3) 「怎麼着」

「怎麼」は南京官話でも用いるが、「着」をつけて述詞化することはない。

金氏教科書では「怎麼着」の用例が1例ある。

- (60) 你猜怎麼着，我走了足有六刻的工夫兒還沒到哪。（《華言分類撮要》第二章）

4) 「多麼」

疑問・感嘆をあらわす「多麼」は南京官話では用いない。

金氏教科書における「多麼」の用例が6例ある。

- (61) 您瞧他有多麼可惡，買了我們東西去，說是今兒給錢，趕我們一和他要錢，他不但不給錢，還張口罵我們。（《土商叢談便覽》第八十六章）
- (62) 你說這一家子人有多麼難受。（《華言分類撮要》第二章）

5) 「更」「還」

副詞「更」「還」などの副詞を用いて比較するばあい、南京官話では副詞の後に「要」を用いるのが普通なようである。北京語ではこれを用いない。

金氏教科書は「更要」「還要」の使用例は見当たらない、全て「更」「還」になる。それぞれの用例は4例と13例ある。

- (63) 他老這麼因循着不辦，不是一天比一天更壞了麼。
- (64) 心比天還高，命比紙還薄。（《華言分類撮要》第三章）
- (65) 你看那富足人家，若是敗落了可比那原來窮人家還難辦。（《土商叢談便覽》第二十二章）

6) 「都」

「都」を特指疑問文に用い、問うところのものが何々であるかをきく用法は南にはない。

「都」を特指疑問文に用いる用例が95例ある。

- (66) 現在天津地方兒都是有甚麼營呢。（《談論新編：北京官話》第五十八章）
- (67) 那個地方住着有多少家子百姓，都是作甚麼的。（《華言問答》第二十四章）

7) 「準」

「準」は「たしかに、きっと」の意の副詞に用いるのも北方語で、南にはこれに正確に相当する語がないようである。

金氏教科書では「たしかに、きっと」の意で使われる「準」の用例は33例ある。

(68) 凡各省官缺的好歹，以及本官每年準有若干進項，他無不了然於心。（《繙神談論新集》第五十九章）

(69) 若是櫃上當夥計，都能如此用心，各盡其職，把買賣整理的鐵桶相似，就是每月吃櫃上的勞金，年終得櫃上的謝儀，自己問心準可以安了。（《華言問答》第二十章）

8) 「直」

「直」を「しきりに」「とめどもなく」の意に用いるのも北方語である。南ではこのように用いない。

金氏教科書では「しきりに、とめどもなく」の意で使われる「直」の用例は70個ある。

(70) 趕這個大夫剛進到屋裡坐下，也得了霍亂了，就直吐直拉，不大的工夫，大夫死在這個病人家裡了。（《華言問答》第二十四章）

(71) 我就聽見他們兩人直吵嚷，問他們是為甚麼，兩人都不肯說。（《士商叢談便覽》第十九章）

9) 「趕」

時間の到達をあらわす「趕」は南では用いず「等」または「到」を用いる。

金氏教科書では、「趕」の用例が大量に見られ、計401例ある。大量に用いられる「趕」は北京語の鮮明な特徴の一つだと考えられる。

(72) 趕會試得意之後，必要大展經綸。（《繙神談論新集》第二十三章）

(73) 趕快開船的時候兒忽然來了七八個人，都上了擺渡船了。（《談論新編：北京官話》第七十七章）

(74) 趕過幾天遇見甚麼事，他那副脾氣又來了，到底始終老改不了。（《華言分類撮要》第二章）

10) 「使」

材料や用具をあらわす「使」も北方語に特有のものらしく南では用いない。

金氏教科書では材料や用具をあらわす「使」の用例が29例ある。

(75) 他就吩咐人，就把細軟的東西都搬了走，下剩平常使的傢伙，都留下了。（《北京官話：今古奇觀》沈曉霞）

(76) 那是這麼着，誰使多少銀子，誰出多少利錢，這還不是公而且道的事麼。（《士商叢談便覽》第六十五章）

(77) 有一天我看見有很多的兵，從教場撤操回來，使的都是洋槍。（《談論新編：北京官話》第五十八章）

5 まとめ

本稿は金氏教科書に用いられた言語と太田氏の研究における北京語の特徴の比較対照およびその関連性について検討を行った。

1) 太田氏が提示した「北京語における7項目の特徴」と金氏教科書に使用された言語の対照を通して、後者は7項目の特徴を全て有すると判明した。さらに、「來着」と「多了」以外、5項目における

用例がそれぞれ 100 を超えたことから、金氏教科書は北京語の特徴が鮮明で、北京語で書かれていると判断できる。この 5 項目は北京語の特徴を正確に反映していることが分かる。

2) 太田氏の「北京語に独特と思われる 12 語」との比較対照を行い、金氏教科書では「罷咱」以外、他の 11 語全てが用いられることが明らかになった。「罷咱」について、太田氏 (1965) によると、やや古い北京語特有の助詞として《儿女英雄伝》での用例は 14 例で、金氏教科書とほぼ同時期の《官話指南》と《九江書会本官話指南》での用例は見当たらない。そのため、「罷咱」は時代の変遷につれて使われなくなった、或いは地域性が強い北京語語彙であることが推測出来るが、更なる検証が必要である。

3) 太田氏の「清代の北京語について」で考察した項目に基づいて 10 項目を取り出し、金氏教科書の言語特徴をさらに詳しく考察し、10 項目に提示した北京語特徴が全て当てはまったことから金氏教科書の言語性格がより明確的に見えてきた。

金氏教科書の書名では、「北京語」、「北京官話」が多く使用されていて、それらの書名が示したとおりに、金氏教科書は北京語のテキストとして世に提供され、当時の北京語の実態を反映しているものと思われる。今回は太田氏が提示した計 25 項目の北京語の特徴との比較対照を通じて、金氏教科書は太田氏の北京語の特徴をほとんど有することが判明し、即ち、金氏教科書は純粋な北京語を使用した物と言える。また、金氏教科書は当時の北京語教科書として典型的な物であり、当時の北京語を研究する際、貴重な文献材料であることが改めて認識できた。

しかし、金氏教科書に用いられた言語特徴を解明するためには、本稿で比較した太田氏の研究における北京語の特徴の 25 項目だけではまだ不十分である。また、全ての項目が金氏教科書の言語と一致するという訳ではない。例えば、金氏教科書は「～得很」「～得慌」両方ともに用例がある。そして、「…就結了」と「…就得了」の用例はあるが、「…就有了」の用例はない。山田氏 (2004) は「當然、「北京話」也是一種比較籠統的稱呼。其實「北京話」內部，因為地域、使用者的社會階層等等的不同因素而形成諸多差異。…通過對比我們發現跟《北京官話 今古奇觀》比較接近的是《小韻》。《今古》和《小韻》也許出自同一個方言區的作家之手。這個問題比較複雜。在充分考證之前不能輕易下結論。」

(第 113 頁) と指摘した。金氏教科書の言語が太田氏の北京語の特徴に当てはまらない部分について、山田氏が提示した北京語の内部差異が一つの原因だと考えられる。

金氏教科書の語学研究は北京語内部差異の問題に深く関わっており、今後継続して取り多面的に組んでいくことが必要だと考える。

研究資料

- 金国璞・平岩道知 1989 《談論新編：北京官話》 平岩道知
—— 1901 《士商叢談便覽》上巻 文求堂書店
—— 1902 《士商叢談便覽》下巻 文求堂書店
——・吳太寿 1902《支那交際往來公牘：北京語直譯附》 泰東同文局
—— 1903 《華言問答》 文求堂書店
——・諸岡三郎編 1903 《虎頭蛇尾》 諸岡三郎

- 改訂 吳启太・鄭永邦著 1903 《改訂官話指南》第一卷 文求堂書店
- 1904 《北京官話：今古奇觀第1編》 文求堂書店
- ・鎌田弥助 1907 《晉神談論新集》 文求堂書店
- ・瀬上恕治 1907 《華語分類撮要》 文求堂書店
- 1911 《北京官話：今古奇觀第2編》 文求堂書店

参考文献

- 太田辰夫 1958 『中国語歴史文法』 江南書院
- 太田辰夫 1950 「清代の北京語について」『中国語学』第34号 日本中国語学会
- 太田辰夫 1965 「北京語の文法特点」『中国研究：經濟・文学・語学 久重福三郎先生坂本一郎先生還曆記念』久重福三郎先生坂本一郎先生還曆記念行事準備委員会
- 太田辰夫 1969 「近代漢語」（太田辰夫執筆）『中国語学新辞典』中国語学研究会編
- 太田辰夫 1975 「『兒女英雄伝』の副詞」『神戸外大論叢』第26卷 第3号
- 常瀛生 1993 《北京土話中的滿語》北京燕山出版社
- 周一民 1998 《北京口語語法》（詞法卷）語文出版社
- 山田忠司 2004 「關於『北京官話 今古奇觀』的語言」『文学部記要』第18（1）号 文教大学
- 山田忠司 2016 「太田辰夫の北京話研究」『中国語研究』第58号「中国語研究」編集委員会編
- 楊杏紅 2014 《東亞漢語史書系 日本明治時期北京官話課本語法研究》廈門大學出版社